自然科学書協会会報
NSPA JAPAN
THE NATURAL SCIENCE PUBLISHERS' ASSOCIATION OF JAPAN
発行人｜金原　優
編　集｜広報委員会

■ 自然科学の時間―グローバルスタンダードと技術者　社会的境界条件の解を求めて
千葉工業大学　教授　脇本　隆之

■ 第64期第1回定時総会報告ほか

■ 専門委員会第63期活動報告・第64期活動計画

2014.10.15　NO.4　（通算74号）

一般社団法人　自然科学書協会｜〒101-0051　東京都千代田区神田神保町1-101｜神保町101ビル1階｜TEL 03-5577-6301｜http://www.nspa.or.jp/

●・・自然科学の時間
―グローバルスタンダードと技術者・・●

社会的境界条件の解を求めて

千葉工業大学　電気電子情報工学科
教授　脇本　隆之

落雷や断路などが起きることによって送電線には異常電圧が生じます。発電機や変圧器などの電力機器はこれに対して十分耐えるよう設計しますが、それを確認するために高電圧を機器に印加する絶縁耐力試験を実施します。電圧が高くなると低電圧領域では見られなかった特有の現象が現れるため、高電圧工学は古くから一つの学問として成立してきました。しかし現在では高電圧工学を専門に教える大学も徐々に減ってきており、電力産業界では高電圧の知識を持つ技術者の養成に頭を抱えているようです。

私も学生時代に高電圧研究室の門を叩いてから約三〇年経ちましたが、振り返ってみると高電圧工学の中道でなく複合分野を取り入れた境界領域を歩んできました。そのため高電圧工学はあまり詳しくなく、雑学的なことが私の知識の大半を占めているといったような状況でしょうか。でもそれがわが国のグローバルスタンダード化に役立っていると言ったら大げさかも知れませんが、本稿では私のような脇道にそれた研究者が新しい分野を発掘・開拓し、暗中模索しながら目標に向かっていくさまを綴ってみたいと思います。

●卒論は高電圧のディジタル測定

昭和も終わりに差し掛かっていた頃、私は大学四年生で卒業研究と格闘していました。私に与えられた卒研テーマは「高電圧インパルスのディジタル測定」。アナログ一辺倒であった高電圧計測の分野にはディジタルなどどこにも見当たらず、指導教授も六〇歳を超えた年齢でコンピュータなど扱ったことがない全くの素人でありました。幸いなことに私は二年生の時に最新鋭機PC―9801M2を購入しておりました。それはカラープリンタとセットで七六万円もしたものですが、家庭教師や学習塾のアルバイトを掛け持ちして長期ローンで購入した血と汗の結晶でした。私は早速そのパソコンを研究室に持ち込んで研究を開始したことは言うまでもありません。周囲に助言者がいない状況でしたが、日本でも割と早いうちにインパルス高電圧のディジタル計測技術が立ち上がったわけです。

その後私は大学院へと進学し、高電圧計測の研究分野に研究者として足を突っ込んでいくのですが、ディジタルの世界ではごく当たり前の事項でも、これを高電圧分野に適用してみるとすべてが新しいことばかりで誰も理解できない世界でした。そのお陰で私はこの分野で生き残ったのではないかと考えています。さらに〝時〟も私に味方していたようです。一九八〇年代の終盤に国際規格IECはディジタル測定に対応した規格に変更されつつありました。私はIECやJEC規格の改定案に意見を出せる末席を得て、これまでの蓄積が反映できるようになってきました。まだまだ新しい技術に対応できる人材が少ないことから、私は忙しい日々を送ることになったのです。

●標準測定システムの開発

一九九八年に高電圧業界では標準となる測定システムの開発プロジェクトが始まりました。そのプロジェクトリーダーは私が師事した教授でした。大学院を卒業後、地方の高専の助手として勤務していた私は、教授の招きでそのプロジェクトに参加するため上京することとなりました。

測定システムとは、数十万ボルトもの高電圧を一〇〇ボルト以下の電圧に低減する分圧器とオシロスコープとを組み合わせたものですが、当時の高電圧業界で

500キロボルト雷インパルス電圧用標準分圧器

はオシロスコープは技術と想像が及ばず手が出せず分圧器だけが開発の対象となっていました。その分圧器の性能評価試験に私は多くの新しい技術（といっても情報分野では当たり前の技術でしたが）を用いた試験法を開発しました。例えば当時はネットワークが10Ｂａｓｅ―５の太いケーブルから10Ｂａｓｅ―２の細いケーブルへと置き換わる過渡期で、安価な市販品が出回るようになって来た時代です。狭い測定室には測定器と制御用ＰＣだけをおき、ＬＡＮを介してオフィスのＰＣで即時に解析が行えるよう環境を整え、試験自体も自動化しました。これはあとに述べる「測定の不確かさ」を小さくするために必要なことだったのですが、当時はそのことを知る由もなく、ただディジタル技術の恩恵を高電圧計測の世界にもたらすことに熱中していたのでした。

●「測定の不確かさ」なんて必要ない!?

高電圧試験に関するＩＥＣ規格の改訂案には「トレーサビリティ」や「不確かさ」の用語が出てきていました。しかし高電圧関係者は誰も聞いたことのないその不思議な用語に戸惑い、皆が口を揃え「そんな概念は不要である」と結論づけていました。

しかしただ電総研（当時）の永井一嘉氏（故人）だけは、それらは重要な概念であり、統計学をもっと勉強するようにと唱えられていました。統計学など大学で学んだきりの私は、早速通信教育を受講して基礎から統計学の復習をしました。そして計測の世界では「不確かさ」や「信頼水準」の概念がごく自然に使われていることを知り、「不確かさの概念を用いて性能を評価する必要はない！」とまで言い切っていたわが業界の排他性に驚きました。

しかし反面、この概念を一刻も早く取り入れることによって時代を先取りできると私は考えました。海外の標準機関を調査すると、確かにどの機関もそれぞれが独自の方法で不確かさの値を公表していました。そこで私は標準分圧器の測定の不確かさの評価にとりかかったのです。しかし海外の機関の公表値は、九五パーセント信頼水準に基づく測定の不確かさの値のみであり、その導出過程は公表していません。最初から行き詰まった私は各国の標準機関を訪問して個別に聞いて回ることにしました。しかしこの情報は重要機密です。易々と教えてくれるはずはない、門前払いで断られるだろうという私の想像にも関わらず、意外にも彼らは皆親切に口頭で教えてくれました。しかし、「言うは易く行うは難し」で理解には大変な困難を伴いましたが、私はそこで得た知見を肥やしとして独自の方法を編み出し、国内で最も早く評価することに成功したのです。

その成果を国際学会で公表したところ、多くの国から注目をあびることとなり、その結果わが国の高電圧計測工学に陽の光が当たり、その産物として標準分圧器を中心とした測定システムはわが国を代表する計測標準として国際的に認知されることとなったのです。

標準分圧器（右手前）と基準分圧器（右奥）の比較校正試験
（左の装置は 150 万ボルトインパルス電圧発生器）

●海外からの研究オファーそしてこれからをみつめて

この分野では、ドイツ、フィンランド、オーストラリアの技術が突出していました。私はそれらの国家標準機関を訪問したのですが、ある日彼らから共同研究のオファーが舞い込んできました。私が開発して評価した標準測定システムの性能及び技術を評価されてのことでした。研究テーマは「低電圧校正システムの国際比較試験」で、オシロスコープの校正技術を各国が持ち寄り比較しようという試みです。かつて誰も手が出せなかったオシロスコープでしたが、すでにその頃には校正装置を開発し、不確かさ評価も行っていました。研究の結果、各国ともその技術に遜色ないことが確認され、その成果を米国電気学会（ＩＥＥＥ）に私が筆頭著者で報告しています。さらに現在では欧州計量研の団体 Euramet から高電圧分野の会議に毎年招待されています。

海外では日本の標準であると事実上認識されている標準測定システムですが、日本の国家標準ではありません。また計量法に基づくＪＣＳＳマークを付けることも出来ません。このためこの計測標準に国のお墨付きをもらうために現在、経済産業省、産総研、日電検など関係各所で技術的問題がないことの証明を調整し始めたところです。これは技術面のみならずシステム面での対応も必要であり、まだまだハードルは高いのです。さらに高電圧分野には数多くの標準が構築されなければいけません。国はこれを民間活力に期待していることから、私達がこれ

を担っていかねばならぬと襷を掛け直しているところです。

脇本　隆之（わきもと　たかゆき）
一九八九年、佐賀大学大学院理工学研究科修了。博士（工学）東京大学。一九九〇年、呉工業高等専門学校助手。一九九五年、日本工業大学超高圧放電研究センター助手。二〇〇七年、千葉工業大学電気電子情報工学科准教授を経て現在同学科教授。専門は高電圧工学、電力工学。電気学会、電気設備学会、国際大電力システム会議（CIGRE）等会員。

専門委員会第六三期活動報告・第六四期活動計画

●販売・出展委員会

第六三期（平成二五年六月～二六年五月）の活動は次の通りです。

第二〇回東京国際ブックフェア（TIBF二〇一三）を例年通り後援し、協会単独ブースで展開しました。二〇一一年以降三年連続で、東日本大震災と福島原発事故からの復興支援の特設コーナーを設け、「震災復興関連書」の展示も行いました。（期日：平成二五年七月三日（水）～七月六日（土）、会場：東京ビッグサイト、参加社数：六〇社、出品冊数：二、五三九冊、売上冊数：四一五冊、売上金額：一、一四一、三四三円）

自然科学書フェア二〇一三を、紀伊國屋書店札幌本店（期日：平成二五年六月一日（土）～六月三〇日（日）、テーマ：自然科学の力・科学立国日本の再生）ならびに、三省堂書店名古屋高島屋店（期日：平成二五年九月六日（金）～一〇月四日（金）、テーマ：科学と医学・技術図書フェア）で行いました。それぞれ相応の売り上げを確保し、自然科学書の地域での普及に有益な結果を得ることができました。

海外のブックフェアについては、今期から当委員会で担当することとなりましたが、事前準備ができなかったため、前年通りに第二〇回北京国際図書展示会、第六五回フランクフルトブックフェアに参加しました。

第六四期（平成二六年六月～二七年五月）の活動も例年通り実施しています。第二一回東京国際ブックフェア（TIBF二〇一四）、第二一回北京国際図書展示会（BIBF二〇一四）については、今号に記載されています。第六六回フランクフルトブックフェアは一〇月八日（水）～一二日（日）に、自然科学書フェア二〇一四は一〇月一日（水）～三一日（金）に『科学立国日本を支える自然科学の力』をテーマとし喜久屋書店小倉店で開催しています。

（委員長　筑紫恒男）

●広報委員会

平素は広報委員会の事業にご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。広報委員会の主たる事業は三つありまして、一つ目の事業は年四回発行する会報です。前期も盛りだくさんの記事を掲載しました。バックナンバーは当協会ホームページに掲載してあります。今期も引き続き会員各社の皆様に有効な情報をご提供すると共に、外部に対しまして当協会の活動や存在意義を提示していきたいと考えております。二つ目の事業はPR活動です。こちらも会報同様に前期は協会のホームページや業界紙に当協会のイベント告知や活動報告を提示しました。今期も引き続き当協会の活動や存在意義を提示していきたいと考えております。三つ目の事業は自然科学書協会講演会です。前期の講演会は昨年の七月二一日（日）に日本出版クラブで開催しました。講師には芳沢光雄氏と山根一眞氏をお迎えし、興味深い自然科学の講演内容となりました。詳細報告は、会報二〇一三年第四号の七～八ページに掲載されております。また今期の講演会は、七月二七日（日）にアルカディア市ケ谷で講師に小泉武夫氏をお迎えし、「わが心に残る発酵食品」をテーマに実施しました。詳細につきましては、本号に別掲されておりますのでご参照ください。

当委員会に対するご意見や、ご要望等がございましたら、お気軽に事務局宛てにお寄せください。今後とも広報事業に深いご理解とご協力をよろしくお願い申し上げます。

（委員長　牛来真也）

●著作・出版権委員会

電子媒体複製（紙媒体著作物をスキャンしたPDF等の作成）の許諾に関する問題が避けて通れない状況となり、当協会が所属する出版者著作権管理機構（JCOPY）の使用料規程の改定に積極的に参画しました。新しい使用料規程は来年前半に施行することとなりますが、当然これに伴い管理委託契約約款も改定されることとなります。もちろん電子媒体複製の許諾にはその権利を出版社が持たなくてはなりません。したがって新しい出版契約書で対応することになります。日本書籍出版協会でも現在検討していますが、特に専門性の強い当協会の出版物に対応できる出版契約の検討を当委員会でも進めたいと思います。

また来年一月に改正著作権法（電子書籍にも「出版権」を認める）が施行されることとなりましたが、出版契約書のあり方とともに従来からの主張であった著作隣接権の扱いを今後どう考えていくのかも当委員会での検討事項としたいと思います。

なお現在日本複製権センター（JRRC）・学術著作権協会（JAC）も複製権管理機構として機能しており、ほぼ三者鼎立の状況にあります。これは利用者にとって極めて複雑で利用しにくい状態になっています。この解消のためにはJRRCの大幅な改革が必須であり、これ

に向けて当協会としてはＪＣＯＰＹに協力していきたいと思います。

従来の「転載許諾に関するガイドライン二〇〇八」を必要に応じて改訂していくことも当委員会の仕事です。

以上会員社の皆様のご協力を今後ともお願いいたします。（委員長　及川　清）

●研修委員会

研修委員会は会員社に対する研修会や、一般読者を対象としたサイエンスカフェの開催を通して、会員社には有益かつ必要な情報提供を、一般読者にはさらなる自然科学関連知識の普及および啓蒙ができるよう活動しております。

前期の研修委員会では、日程・講師の都合がつかずサイエンスカフェは残念ながら開催出来ませんでしたが、会員研修会として国立国会図書館参観を平成二五年一一月一四日（木）（参加者一七社二四名）と平成二六年五月二八日（水）（参加者一七社二四名）に開催いたしました。

今期に入りまして六月二二日（日）三省堂書店との共催で、講師に浦島充佳・慈恵会医科大学教授、コーディネータに保坂直紀氏・東京大学海洋アライアンス上席主幹研究員を迎え、「グローバルヘルスとリーダーシップ」と題したサイエンスカフェ（参加者一四名）を開催いたしました。

今期の研修会につきましては現時点で具体的な開催予定は決まっておりませんが、引き続き出版梓会などの関連団体との共催も見据えつつ、委員の皆様ともテーマについて協議を重ねながら、今期中に研修会を開催したいと思います。

また、研修対象として「これぞ！」というものがございましたら、ぜひ研修委員会宛にご一報いただければ幸いに存じます。

今後ともよろしくお願い申し上げます。

（委員長　曽根良介）

●総務委員会

任期の折り返し地点を迎えた総務委員会ですが、今期も飯塚担当常務理事、吉野副委員長、古屋委員に私と四名の所帯で運営して参ります。総務委員会を一言で言い表すと、「常務理事会および各専門委員会が担当されない部分のほとんどを担当する委員会」になります。ユーティリティー部門？　いや自らを奮い立たせるため格好良くジェネラリスト軍団とでも言っておきましょう。

そんな総務委員会の活動内容ですが、前期は決算および予算案の策定、入出金の管理、会員名簿の作成、英文会員名簿の作成、年末懇親会（東京會舘）の開催、総会・会員集会・理事会などの運営、出版印刷人の集いおよび出版平和堂への参加などを行いました。今期も決算および予算案の策定はもちろんのこと、年末懇親会（東京會舘）の開催を含め、例年同様の活動を行って参ります。協会運営も年々厳しさを増して参りました。資金の管理を行う部門として、協会活動が円滑に行えるようこれまで以上にコスト管理を試みていくつもりです。事務局とも連絡を密に取り、協会運営が円滑に進むよう今期も総務委員会一同努力して参ります。会員各社の皆様のご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

（委員長　長　滋彦）

●税制・再販流通特別委員会

長年五％に据え置かれていた消費税も今年四月一日に八％に変更となり、当協会としても適切な消費税転嫁のためにその周知と対応を行いました。具体的には会員各社による出版物への本体価格表示の徹底と、流通過程、書店店頭における本体価格に基づくレジ転嫁への理解を求めました。また、経過措置にあった雑誌の四月一日以降の旧税率適用も実務的ではないとして出版界の要請により事前に削除され、この点でも混乱を避けることができました。

五％から八％への変更は特に大きな混乱なく乗り切ることができましたが、来年一〇月一日には更に一〇％への変更が予定されています。当協会としては八％変更時の経験を基に、各社ともほぼ同じ方式で対応できるものと考えていますが、正式には税率変更の時期、また経過措置が発表になっていないので具体的な方法論については後日検討することとしたいと思います。

一〇％への変更が予定通り一〇月であり、経過措置が前回と同様であるとすると、一月―一二月を期間とした雑誌の年間購読契約は基本的に前年に行われることから一〇月号以降分も含めて全て旧税率での対応が可能となり、混乱はかなり避けられるものと思われます。但し、二〇一五年の途中、特に二〇一五年五月以降から始まる年間購読は三月までに契約すれば全て旧税率とするという移行措置も適用にならないため、その年間購読に含まれる一〇月以降発行分の消費税は全て一〇％となり、年間の購読代金は一〇％分が何号含まれるかによって変化し、その処理が複雑化してしまいます。

税率変更への対応と並行して今後の大きな問題は出版物への軽減税率適用です。出版物は国民の心の糧、学術と文化の伝達手段であることから軽減税率が適用されることには合理性があるものと考えます。しかし軽減税率を適用するためには、適用される出版物の区分の問題を含め、いくつか解決しなければならない問題があります。

消費税は、基本的に売上にかかる仮受消費税から仕入にかかる仮払消費税を差し引いた差額を納税するものですが、仮

に出版物に対する軽減税率が八％、課税仕入（商品仕入、印刷、用紙、製本、人件費・金利等を除いた一般経費）割合が五〇％とすると、将来消費税が一六％以上になると仮払消費税が仮受消費税を上回り、消費税還付の必要性が出てきます。軽減税率適用を求める場合、この逆転現象が起きた時に消費税が間違いなく還付される仕組みが必要です。

消費税には非課税のものがあり、その主なものは医療費、授業料、小中高教科書、居住用住居の家賃等ですが、現在のところこれらの商品の仕入にかかる消費税は還付されないので売上に転嫁し、仮払消費税は経費処理しなければなりません。現在でも右記の非課税商品を購入している消費者は非課税と言いながら、実際には仕入にかかる消費税はそれぞれの代金の一部として負担させられていることになります。消費税が一〇％になると仕入にかかる消費税も一〇％となり、二％の差額分を販売価格に転嫁しなければ本来消費者が負担すべき消費税をこれらの事業者は自ら負担することになってしまいます。当協会の会員社のなかにも小中高の教科書を発行している会社もあり、非課税商品の消費税処理は重要な問題です。

軽減税率の問題は非課税商品の消費税問題と切り離せない関係にあり、両者は同一の問題として出版業界内はもとより政府関係各省庁で検討すべきです。出版物に軽減税率が適用されることにより、現在非課税の扱いとなっている重要性のより高い商品・サービスより出版社あるいは読者が優遇されるようなことになると、財源の問題はもとより、社会全体の税負担のバランスを欠くことになり、新たな問題を発生させることになります。消費税軽減税率の要請はこれらのことも含め、慎重に考えたい問題です。

消費税以外の問題としては再販制度の継続問題がありますが、現在のところ当面継続ということで落ち着きを見せています。今後は電子配信、電子出版も再販制度の対象とすべきかどうかについて当協会としても検討していく必要があるでしょう。また専門書としての電子配信を今後どのように考え、実行していくかについても検討しなければなりません。医学専門書出版社によって現在検討が進められている共同配信会社の進展を参考にしながら、理工農家政の分野でも応用できるかどうかについて当協会内の他の委員会と連携して検討を進めたいと思います。

（委員長　金原　優）

自然科学書フェア二〇一四開催（喜久屋書店　小倉店）

自然科学書フェア二〇一四を『科学立国日本を支える自然科学書の力』をテーマとして、一〇月一日（水）～三一日（金）まで北九州市小倉駅前にある喜久屋書店小倉店にて開催しています。各社のロングセラーや各分野の先端技術や新しい事例、研究等に関する新刊書を中心に選書しました。また中国から飛来する黄砂やPM2・5等の大気汚染、地震、身の回りの環境汚染等の環境に関する書籍、TIBFで好評だった統計学についての書籍を特別コーナーで展開しています。協会会員社四四社から八六七点の出品があり、総冊数で一、〇〇〇冊を超えるフェアとなりました。

フェアの宣伝として、チラシ一、〇〇〇部、ポスターを数十枚作成し、コレットビル内、小倉駅をはじめ、近郊の主要駅構内にポスターを掲示しました。また株式会社とうこう・あいの協力により、西日本新聞、朝日新聞、毎日新聞の地方版にフェア開催の記事を掲載しました。

（販売・出展委員会　諸星安紀）

■第六四期委員会開催一覧

（二〇一四年七月～九月）

●理事会

・七月一七日（木）七月定例理事会／一五時三〇分～一六時四〇分　日本出版クラブ会館

・九月一八日（木）九月定例理事会／一五時～一七時　日本出版クラブ会館

●監事会

・七月一日（火）監事会／一二時～一三時三〇分　文化産業信用組合

●専門委員会

・七月一一日（金）販売・出展委員会東京国際ブックフェア運営委員会／九時三〇分～一五時　文化産業信用組合

・七月一一日（金）販売・出展委員会自然科学書フェア小委員会／一五時～一六時　文化産業信用組合

・七月一一日（金）販売・出展委員会／一六時～一七時三〇分　文化産業信用組合

・七月一五日（火）広報委員会／一七時～一七時四五分　コロナ社会議室

・八月七日（木）税制・再販流通特別委員会／一三時～一五時　日本出版クラブ会館

・八月二六日（火）著作・出版権委員会／一五時～一七時　日本出版クラブ会館

・八月二九日（金）販売・出展委員会自然科学書フェア小委員会／一六時～一八時　日本出版クラブ会館

・九月二五日（木）研修委員会／一五時～一六時三〇分　日本出版クラブ会館

■事務局だより

〈代表者の変更〉

●株式会社　オーム社

旧代表者：竹生修己

新代表者：村上和夫

〈代表者ならびに当会代表者の変更〉

●株式会社　井上書院

旧代表者：関谷　勉

新代表者：石川泰章

〈専門委員会委員の変更〉

●販売・出展委員会

・株式会社　中山書店

旧委員：服部佑弥

新委員：児島　誠

●著作・出版権委員会

・株式会社　コロナ社

新委員：大井隆之

■年末懇親会開催のお知らせ

一二月四日（木）一八時より東京會舘にて恒例の年末懇親会を開催致します。懇親会には、会員社の代表者様はもとより、関連団体代表者及び当協会専門委員会委員の皆様にもご参集いただきまして、この一年の締めくくりと、相互交流を深める一夕にしたいと思っております。多くの方のご出席をお待ちしております。

サイエンスカフェ報告

六月二二日（日）三省堂書店との共催で、三省堂書店本店二階UCCカフェコンフォートにおいて一五時から一六時一〇分までサイエンスカフェを開催いたしました。

会場風景

当日のテーマは「グローバルヘルスとリーダーシップ」講師は浦島充佳・慈恵会医科大学分子疫学研究室教授、コーディネータは保坂直紀・東京大学海洋アライアンス上席主幹研究員でした。事前申込者は二六名でしたが、あいにくのお天気のため参加者は一四名になりましたが、講師の講演後の質疑応答は大変活発で終了時間を忘れる程盛り上がり、まさにサイエンスカフェのコンセプト（喫茶店の打ち解けた雰囲気の中で、自然科学の研究者と皆様が最先端の話題について語り合い、そして会話の中で素朴な質問や意見が飛び交う）にあった会になったかと思います。

（研修委員長　曽根良介）

東京国際ブックフェア報告

七月二日（水）から七月五日（土）までの四日間、東京ビッグサイト西ホールにおいて「第二一回東京国際ブックフェア」（TIBF二〇一四）が開催されました。当協会は、例年と同じく三・五小間のブーススペースで出展し、展示・販売を行いました。

今年の書籍・雑誌の出品冊数は、協会加盟社のうち六二社からの出品と、一般出品の三社を加えて、総出品冊数は二、五三六冊でした。商品展示は各分野別に行いましたが、今年も特別展示コーナーを設けました。展示内容は、「ビギナーにおすすめ、目で見るサイエンス」と「統計学はおもしろい」の二つの展示テーマとしました。両コーナーともに読者に大変好評で、特に「目で見るサイエンス」のコーナーには、親子で本を選んで購入される様子も見られ、子どもたちが自然科学に興味を持つ機会を提供できたと思います。また、今年もご来場された読者の方へのサービスを行いました。ここ数年継続して行い、大変好評を博している、抽選による図書カードのプレゼントと、各社より提供されたオリジナルノベルティのプレゼントを実施しました。

ブース内風景

会期四日間の主催者発表による来場者数は、同時開催展を合わせて、六二、八五五人で、昨年を二八五人上回りました。当協会ブースでの売上合計は、五一七冊、一三五万円余りとなり、昨年を大きく上回る結果となりました。ご協力ありがとうございました。

（販売・出展委員会　高田光明）

定時（決算）総会・懇親会報告

七月一六日（水）一七時より日本出版クラブ会館さくらの間において一般社団法人自然科学書協会第六四期第一回定時総会が開催されました。総会の開催に当たり金原理事長は「電子出版物における出版権の創設など対応すべき問題は未だ山積している。特に著者との取り決めなど、専門書には特有の問題がある。書協に任せきりにするのではなく、協会として考え、解決に向けた努力を行う必要が

あるので会員各社にもご協力いただきたい。」と挨拶されました。

議事に入る前、定款二八条により金原理事長が議長に就任し、議長は出席会員社三四社、委任状出席二九社、合計六三社の出席により総会開催に必要な定足数が確保された旨を会場に報告したうえで、議事録署名人を選出し、議案の審議が行われました。

金原　優 理事長

南條光章 専務理事

飯塚尚彦
総務担当常務理事

会場風景

第一号議案「第六三期事業報告承認の件」は南條専務理事より、第二号議案「第六三期収支決算書承認の件」および第三号議案「第六三期公益目的支出計画承認の件」はいずれも飯塚総務担当常務理事より報告・説明がなされ、いずれも賛成多数により承認されました。これを受け議長は閉会を宣言し、南條専務理事による閉会の挨拶で総会は終了となりました。

なお、同事業報告書と決算書の詳細は当協会ホームページに掲載されております。

引き続き行われた会員集会では、各専門委員会委員長による報告が行われました。

一八時より懇親会が行われ、会場内では人気テレビ番組にも取り上げられた出版クラブの料理に舌鼓を打ちつつ、杯片手に親睦を広める会員の姿が見受けられていました。

（総務委員長　長　滋彦）

自然科学書協会講演会二〇一四報告

自然科学書協会講演会二〇一四が、七月二七日（日）一四時三〇分～一六時一〇分、アルカディア市ヶ谷（東京都千代田区）にて開催されました。今回の講師は、発酵学の第一人者である東京農業大学名誉教授の小泉武夫氏。前月のうちに申込者が一五〇名の定員数を超え、その人気と知名度の高さをうかがわせました（当日参加者数は一一一名）。

当日は、当協会の金原優理事長の開会挨拶から始まり、小泉氏の講演「わが心に残る発酵食品」へ。「発酵仮面」「味覚人飛行物体」などの異名をもつ同氏が、これまで食べてきた世界各地の発酵食品をユーモアたっぷりに紹介しつつ、発酵にみる人間の知恵を語ってくれました。

最初に「世界でもっとも珍しい発酵食品」と紹介したのが、石川県で江戸時代から作られてきた「ふぐの卵巣の糠漬け」。ふぐの卵巣には猛毒テトロドトキシンが含まれていますが、米糠に漬けることでこれが無毒化されるという「解毒発酵」の話でした。それを皮切りに、メコン川流域の「魚の浮き袋の塩辛」、中国の「四〇年ものの鯉の熟れずし」、グルジアの「チーズの塩辛」など、珍しい発酵食品の話題が続きました。中には、食べたこと自体をほめたくなるこんな強烈食品もありました。

「シュール・ストレミング」

ニシンを缶内発酵させたスウェーデンの缶詰で、「世界一臭い食べ物」といわれています。臭さを数値化すると、焼いたくさやが二、五〇〇であるのにたいし、なんとこれは一八、七〇〇！　しかも、缶の中は炭酸ガスが充満しており、開缶時にドロドロの中身が勢いよく飛び出すので要注意。

「ホンオ・フェ」

韓国の木浦市で食べられてきたエイの発酵食品。アンモニア臭が強烈な、世界最強の催涙性食物。日本における尾頭付きの鯛のように、結婚式などで出され、その量で格式が決まるのですが、毎年、食べて死ぬ人も何人かいるそうです。

「キビヤック」

故・植村直己氏も大好物だったイヌ

講師を務める小泉 武夫 氏

会場風景

イットの伝統食。アザラシの腹の中に海燕を羽根をつけたまま詰め込み、土の中で三年間発酵。取り出した海燕の肛門に口をつけて、ドロドロになった体液を吸います。強烈なにおいですが、これが病みつきになるそうです。

笑いと驚き満載で、盛況のうちに終えた講演会。当日欠席が依然と多い課題も残りましたが、参加者の満足度は例年以上に高かったようです。来年以降も広報委員会では魅力的なテーマと講演者を準備し、より充実した講演会にしていきたいと思います。

（広報委員会　柴野　豊）

北京国際ブックフェア報告

第二一回北京国際図書展示会（BIBF二〇一四）が、テーマ国をトルコ共和国として八月二七日（水）から八月三一日（日）までの五日間、北京市「中国新国際展覧センター」にて開催されました。

今年は、当協会として改めてBIBFへの積極的な参加を会員社に呼び掛け、その一環として会員社一社につき一〇点まで一点一、〇〇〇円の出品料の補助を行いました結果、二三社から二九一点（前年＋五社　＋九七点）の商品を出品していただきました。ご協力いただきました会員社各位に販売・出展委員会・国際小委員会幹事といたしまして、先ずはお礼申し上げます。ありがとうございました。

また、BIBF二〇一四日本事務局のご配慮により、当協会ブースとして三コマ（前年二コマ）をご用意いただき、お陰様で出品全点を面出しで陳列することが出来ました。

当協会ブース風景

前述の通り、今回は協会としてBIBFへの積極的な取り組みを行うということで、初めて出品リストを作成し、二七日と二八日の二日間のみではありましたが協会担当の通訳も付け、多くの来場者からの問い合わせに適切かつ十分な対応を行う手筈を整えていたのですが…。

私は社の都合で、会場に詰めていたのは二七日と二八日のビジネスデーの二日間であったため、ビジネスデー三日間を通してのことは語れませんが、前回、前々回に比べ当協会ブースへの来場者ならびに問い合わせ件数が、印象として少なかったように感じられたのが残念でした（前回までは問い合わせ件数を記録していないため、あくまでも印象の範疇となります）。また、初めて作成した出品リストも、会員社名・書名だけは英文を併記しましたが、来場者から「中国語で記載して欲しい」というご尤もなご意見をいただき、来年に向けての検討課題となりました。

弊社も含めてのことですが、版権販売におきましては、商品を陳列しているだけではなかなか契約に結びつき難いところもありますので、是非北京に行かれて会場で商談されることをお勧めいたします。北京市内だけでも一度は見るに値する観光地も多数ありますので、BIBFの現地参加をご検討いただきますよう何卒よろしくお願い申し上げます。

（販売・出展委員会　三澤　岳）

■第六三期／第六四期広報委員

〈担当常務理事〉
宮部信明（岩波書店）

〈委員長〉
牛来真也（コロナ社）

〈委　員〉
柴野　豊（家の光協会）
桑原正雄（岩波書店）
竹西素子（オーム社）
稲沢　会（共立出版）
矢吹俊吉（講談社サイエンティフィク）
大井隆之（コロナ社）
松田和貴（電気書院）
遠矢良太郎（南江堂）
増田素美（丸善出版）

編集後記

暑かった夏もようやく終わりを迎え、今年も残すところ三カ月となりました。

夏真っ盛りだったころ、自宅のエコキュートが故障し、それがきっかけで、初めて取扱説明書を読み、そこで運転モードについての記述を発見しました。これまではデフォルトの毎日深夜にお湯を全量沸かす設定でしたが、直近の一週間の使用量にあわせて沸かす設定に切り換えました。すると、電気代が月額で二、〇〇〇円ほど下がり、特にお湯切れすることもなく使用できています。

我慢や苦労もなく、これほど電気代が下がるのかと驚き、それから電球をLEDに交換したり、サーキュレータを導入したり、冷蔵庫の設定温度を見直したりと、なるべく苦労を伴わない、初期投資の大きくない、節電にはまっています。

（K・M）